

ベラルーシの作家 スベトラーナ・アレクシェービッチさんの講演を聴きました。心の奥にしりぞけていた「チェルノブイリの祈り」を再確認しました。ここにその一部を紹介します。京子

涙と苦しみの文化から「生き延びること」へ

ソビエト誕生の内戦、第二次世界大戦、そしてチェルノブイリ 大統領独裁の現在と人々は苦しみ続け、それは命を軽んずる態度さえ生みだしてきました。そんななかで小さな人々の声を聴きつづけること、一冊の本を書くのに5年から7年の歳月をかけます。

新婚早々の妻はチェルノブイリで消火に当たった消防士の夫を追ってモスクワに行きます。あまりの高線量で被曝した夫には会えず、やっこの思いでたどりついた主治医は、夫を危険な放射性物質だと言い放ちました。

何百年と続く自然とともに生きる暮らしを突然破った原発事故、村から避難する人々のバスの回りを猫や犬ニワトクが取りまわっていました。

数日後、動物を射殺しに入った軍人は駆け寄ってくる犬、訴えかけてくる馬をうち殺さねばなりません。その後、彼は心を病むようになります。

人々の間でささやかれるジョーク「ベラルーシ人はいい民族だったね。」

終わりのない「戦争」チェルノブイリ 誰も自分が受けた正確な線量を知らず、被曝と病気、死の関係を知らされていません。

大統領の独裁態勢の下、低線量被曝と病気の関係を調査した医学者は投獄されます。同僚である妻が国際会議で彼の論文を発表するとIAEAの科学者がそれをうろ消す発表をする。

経済状態の悪化、貧困のなかで汚染されていない食べ物を子どもにやれない家族が増えています。迫害を受けながらも放射能検知器で子どもたちの汚染を調べる科学者がいます。ひとりの子どもの検知器の針が振り切れるほどの高い値に驚いた彼は、その家を訪ねます。

たくさん子どもを養う運転手の父親、コルホーズで働く母は、子どもたちに汚染された土地で飼う牛のミルクを飲ませ、森で獲れたきのこを食べさせることしかできませんでした。

(インドでもスラム街でごみを食べて育つ牛の乳を飲む子どもたちの体内の化学物質の濃度が高いという調査があります。京子)

せめて牛乳から汚染の高い部分だけでも取り除けたらと同行していたスウェーデン人のカメラマンが分離器を贈ります。しかし数年後、その家を訪れた科学者はそれがホコリをかぶって打ち捨てられているのを目にします。

どうして自分自身や子どもたちを守ろうとしないのか？ その問いは汚染を防ぐ覆いなしにトラクターを運転する労働者に向けられます。「あなたは妻や子どもを愛していないのか」と。「そんなことはお偉いさんが考えてくれること」

だから、救援だけではなく、命を大切にする暮らしを子どもたちに教えて欲しいとアレクシャールビッチさんは語ります。

自分たちの便利さや豊かさだけを求め、暴力的に世界を変えようとする文明は終わったのだ。自然とともにつつましく生きていく道、なにかを変えつづける科学ではない科学、……、生き延びる道をさぐらねばならないことを。

大阪の講演会の最初に長崎で被爆された山科さんがあいさつをなさいました。

ヒロシマ、ナガサキからチェルノブイリへそしてコンボ、アフガニスタン、イラクへ生き延びる道をいっしょに考え伝えつづけること、彼女の言葉を聞いた私の思いです。

(メモゆえに聞き取りに間違いがあったらすみません。)